

大西道雄著

『短作文の授業』

作文指導の理論的実践的先駆者である大西道雄先生が、『短作文指導の方法』(明治図書、一九八〇年)、『意見文指導の研究』(渓水社、一九九〇年)に続いて、『短作文の授業』を出版された。

作文といえ、優れた実践においては、何時間もかけて指導され、ある程度の分量をとまったものというイメージがあるが、本書では、その逆であるともいえる「短作文」にスポットが当てられている。

大西先生は、短く書くという形態的特質から生ずる機能的特質を、次の四点にまとめておられる。

- ① 書く場の設定の自在性
- ② 創構(アイディアの創出とその組織化)機能
- ③ 学習技能としての機能

④ 社会的生活的機能

この中でも特に①「書く場の設定の自在性」は、短作文指導においてセールスポイントになる部分であろう。

書く文章の量が少ないということは、書くことの目的や必要に応じ、さまざまな機会をとらえて気軽に書くことを可能にする。書く場と機会が多くなるということは、書くことの指導の機会と場が多く設定できるということである。(十八頁)

この考え方に基づいて、本書では、全編にわたって「書くことの『実』の場」を設定することの重要性が繰り返し述べられている。「実」の場を設定するとは、つまり「短作文の指導の機会と場の設定を必然性のあるものにする」ということである。書く場の設定の自在性に溺れ、

安易に場の設定をすることがあつてはならないと強調されている。

「実」の場を重視することは、学習者の作文意欲を重視することにつながる。そして、「実」の場における短作文活動は、単なる技能の練習ではなく、生きて働く技能として習得、習熟することがで

きる」(二三三頁)ということにもなる。以上のような考えに基づいて、第三章では短作文の力強い授業実践が報告されている。実践の対象としては小中学生が設定されているが、述べられている考え方や授業展開の方法などは、高校の授業においても活用されるべきものであろう。(B6判 一二三ページ 一九九一年 渓水社 一、八〇〇円)

(水元肇)